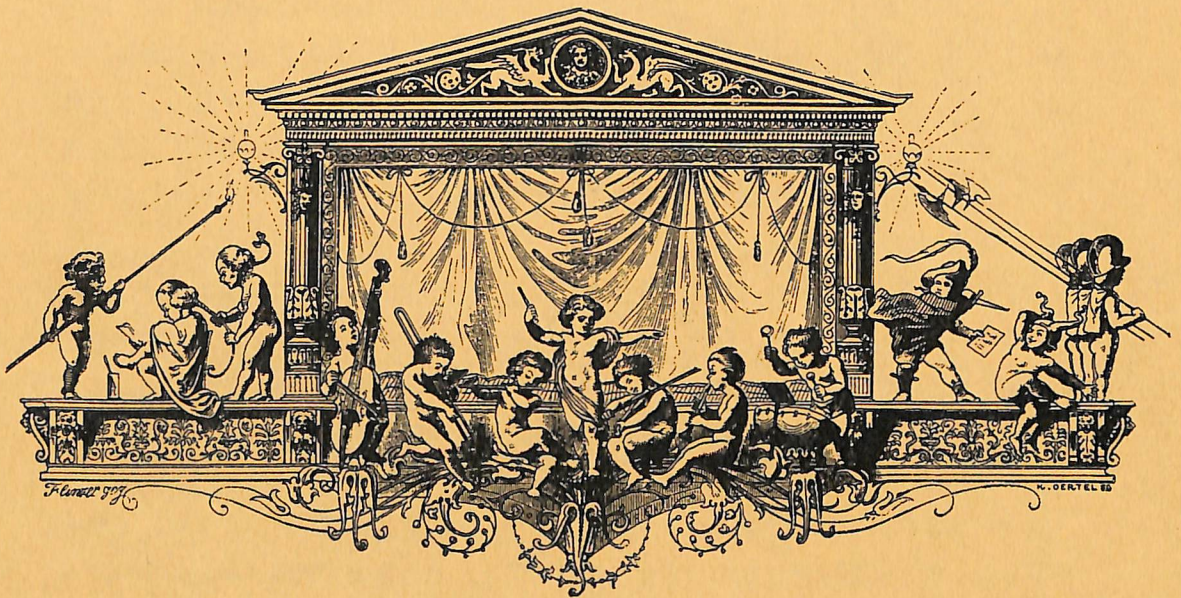


創立40周年記念

40th Concert Concertino di Kyoto

コンチェルティーノ・ディ・キョウト第40回演奏会



1998 10/3 土曜日 7:00PM

京都府立文化芸術会館

主催／才能教育研究会京都支部

■ ご あ い さ つ



新 井 覚

いつの間にか40年経ってしまいました。この合奏団を始めた頃の京都には、未だ音楽のホールは一つもなく、第1回の演奏会は祇園会館でした。その後、京都会館、大谷ホール、シルクホール、文化芸術会館と徐々にコンサート会場が出来て来たことを思うと私にとっては、ほんの少しの間としか思えないのですが、演奏会の頃にはつぎの曲目、メンバー構成、演奏会場とつねに先のことに追われているので、あらためて40年は永い歳月なのだと感無量です。

これまで、何人もの内外の著名な指揮者、ソリストをお迎えしてご指導を受け、多くのものを学びました。本年1月26日に逝去された私の恩師であり、「才能は生まれつきではない、どの子も育つ、育て方ひとつ」とその思想と哲学を世界中にひろめ、スズキメソッドを確立された故鈴木鎮一先生には、この合奏団は大変高く評価されておりました。今宵は、亡き鈴木先生への念と哀悼の意を込めて演奏しようと思っております。

毎年何人かのメンバーは成長して巣立って行き、次に成長過程の生徒が入団して来るの繰り返しで、人数は充分なのですが、合奏団員としての訓練を積み、優れたメンバーになれるまでには時間が掛かります。毎週土曜日の夜2時間の練習でも1年はすぐに過ぎてしまい、毎回、演奏会前には不安感で一杯なのですが、いざ本番となると信じられない位良く弾いてくれまして、私は指揮をしながら感動し、幸福感に浸っております。

ソリストの篠崎友美さんは京都支部仲佐クラスの出身で私の孫弟子に当たり、4才位の時からその成長ぶりには感服しておりました。今夜は立派な演奏できっと素晴らしい共演が出来ることと、楽しみにしております。

これからも”コンチェルティーノ・ディ・キョウト”は50回60回と続いて行くと思しますので、どうか皆様にも、この”京都の小さい合奏団”を励まし、暖かく見守って下さるようお願い致します。

■ ヴィオラ独奏

篠 崎 友 美



才能教育研究会京都支部仲佐クラスにてヴァイオリンを始める。

桐朋女子高校音楽科を経て1991年桐朋学園大学入学

ながのアспен音楽祭に参加し、全額奨学金を得て米国アспен音楽祭に参加。

1992年 ヴィオラに転向

東京国際音楽コンクール室内楽部門において「斉藤秀雄賞」を受賞。

1994年 ライオネル・ターティス国際ヴィオラコンクールコンクール特別賞受賞。

1995年 桐朋学園大学を首席で卒業。

1997年 ミュンヘン国際音楽コンクール第三位

在学中より桐朋学園オーケストラとコンチェルトを協演する他、倉敷音楽祭、霧島国際音楽祭、宮崎国際音楽祭、サイトウキネンオーケストラ、サントリーホール フェスティバルソロイスト等に出演。

室内楽ではJTアートホール室内楽シリーズ、八ヶ岳高原音楽祭等に出演している。

またNHK FMリサイタルにも出演。

現在、紀尾井シンフォニエッタ東京、ジャパンチェンバーオーケストラ、ストリングオーケストラ「響」等のメンバーとして活動している。

1997年 ストリングクアルテットArcoを結成、各地で演奏活動を行っている。

プログラム

ロッシーニ 弦楽のためのソナタ 第6番

アレグロ・スピリトーソ
アンダンテ・アッサイ
テンペスタ/アレグロ

ヘンデル～カサドシュ ヴィオラ協奏曲

アレグロ・モデラート
アンダンテ・マ・ノン・トロポ
アレグロ・モルト

ヴィオラ独奏 篠崎友美

バッハ ブランデンブルク協奏曲 第6番 変ロ長調

アレグロ
アダージョ・マ・ノン・タント
アレグロ

第1 ヴィオラ 篠崎友美 第2 ヴィオラ 江村孝哉

モーツァルト セレナード アイネクライネ・ナハト・ムジーク

アレグロ
ロマンツェ/アンダンテ
メヌエット/アレグレット
フィナーレ/アレグロ

コンチェルティーノ・ディ・キョウト

指揮 新井 覚

第1 ヴァイオリン	大塚 真帆 高木 玲	上田 真希 大八木文人	木田 淳子	大塚 真衣
第2 ヴァイオリン	山本 佳奈 桜井愛由美	安居佑季子 田中めぐみ	山本 怜奈	壁瀬 智
ヴィオラ	江村 孝哉	仲佐 悦子	江村美由紀	井上 拓
チェロ	森田 健二	田村 忠司	長瀬 香恋	
コントラバス	酒井 隆雄			
フルート	坂井 満美	木村 恵己		

■曲目紹介

ロッシーニのソナタは、ヴァイオリン2部、チェロとコントラバスのために、作曲者12才の時に書かれた作品で、ヴァイオリンの技巧的な活躍の掛け合いが魅力的です。ビオラを使っていないのは珍しいことですが、その部分を埋めるチェロと、いわばチェロの部分を演奏するコントラバスの活躍が目立ちます。この第6番では、終楽章が「嵐」と題され、暴風雨の始まりから終わるまでの経過を克明に描写しているのが特徴です。

ヘンデル～カサドシュのヴィオラ協奏曲は、ヘンデルの作品の編曲ではなく、ヘンデルのスタイルでカサドシュが作曲したものです。このほかに、カサドシュは、クリスチャン・バッハのスタイルで同じくヴィオラ協奏曲を、モーツァルトのスタイルで、いわゆる「アデライデ」協奏曲を作曲したことで知られています。テーマやモチーフは魅惑的ではありますが、ヘンデルと言うよりバッハ的なものを感じます。しかし、演奏される機会も少なく、そのために楽譜が洗練される機会を逸した曲という感じを受けます。

2楽章の美しさは格別です。

バッハのブランデンブルク協奏曲第6番は、最初のロッシーニとは逆で、ヴァイオリンを欠き、オリジナルは2本のヴィオラ、2本のヴィオラ・ダ・ガンバ、チェロ、コントラバスという編成で、ヴィオラを特に好んだバッハの渋い特徴がでた曲です。

第1楽章は2本のヴィオラが1拍目を賢明に追いかけ回して、野蛮とも言える戦いを繰り広げているかのようなトゥッティに始まり、カンタービレの正確を持ったモチーフと交互に現れます。第2楽章は2本のヴィオラが、コントラバスの2分音符とチェロの4分音符によって生み出される非常に緊張度の高い経過不協和音を伴う低音にのって二重唱を歌います。第3楽章は第1楽章同様、あたたかも「正しい」拍節を巡るが如き争いに2本のヴィオラにチェロも加わって展開されます。

モーツァルトのアイネ・クライネ・ナハト・ムジークは彼のセレナードの中でも特に人気の高い作品です。とあるレコードの解説に曰く

世界を通じて彼の作品の中で、この曲ほど広まったものはない。専門家、愛好家を問わず、あらゆる人に愛されている。誰もがそこに音楽そのものに惹かれる何かを見出すであろう。優雅な響きと満ちあふれる旋律に包まれた最も魅惑的な楽しみ、そして奇跡と言うべき完璧な形式と選り抜きの洗練された楽想がそこにある。

コンチェルティーノの40年の歩み

カール・ミュンヒンガー率いるシュトゥットガルト室内オーケストラが来日したのは、戦後まもなくであった。ヴィルトゥオーゾ・ディ・ローマ、ソチエタ・コレルリの名が、レコードで紹介されはじめたのもその直後ぐらいであったろう。そして、日本のクラシックファンや専門家の間でもようやくバロック時代を中心とした音楽が理解されようとしていたちょうどその頃のことだ。京都に本格的な才能教育のヴァイオリン教室を作るため、本部松本から若いヴァイオリン指導者が派遣された。彼は、まだバロック音楽の黎明期といった頃に、いち早く、素朴ではあるがきらめく様な輝きを持つバロック音楽の美を見だし、ヴィヴァルディを愛し、バッハを畏敬した。そして自分の教え子達には、ぜひバロック音楽を演奏する楽しみを教えたいと思ったし、自ら、ローマ合奏団や、ソチエタ・コレルリの様に、ヴィヴァルディやコレルリを自由自在に、高い音楽性を持って演奏できる合奏団を作りたいというビジョンを抱いていた。

この夢の実現のため、京都に於けるヴァイオリン指導の開始と同時に、生徒達による合奏団の組織に着手したのである。まず、チェロの生徒育成のため東京からチェロの指導者を招聘し、次にアマチュア指揮者の井手章夫氏を専属指揮者として招き、合奏団の形態を整えていった。彼らの心血を注ぐ指導によって見事な子供の合奏団ができあがった。これがコンチェルティーノの最初の姿で、メンバーのほとんどは戦後のベビーブーム（昭和22-24年）生まれの当時10才前後の小学生であった。

十二分な練習とリハーサルを重ねて開かれた第一回演奏会はまだ京都府会館や近代的なホールのなかった昭和34年11月、重々しい緞帳のさがった祇園会館で行われた。プログラムは、サンマルティーニのシンフォニア、ハイドンのヴァイオリン協奏曲、ヴィヴァルディのチェロ協奏曲と調和の幻想第九番、モーツァルトの喜遊曲K.136であった。この演奏会の模様は一本の古い録音テープに収録されている。テープヒスの中から緞帳の中に整列したメンバーの緊張と自信が伝わってくる。緞帳の上音に続いてコツコツという指揮者の足音、拍手の後の沈黙を破るサンマルティーニのシンフォニアの調べ……。

演奏が進むにつれ、メンバーは日頃の実力を十分発揮しすばらしい演奏を展開している。各自が自分のパートを完全に暗譜するほどに練習してきた自信からだろう。10才前後の小学生による一夜の室内楽演奏会、これは当時としては画期的で驚嘆すべき事であったに違いない。こうして成功の内に第一回演奏会を終え、これから上りきることのない階段を一段一段上ることになるのだ。

「10年ひと昔」という言葉があるが、コンチェルティーノの演奏史上にもまさにこの10年という区切りがあてはまる。第一回から第十回までの10年間の演奏について言えば、「小さな子供達がうまく演奏する」ということに注目を集めた。京都市交響楽団の初代指揮者カール・チェリウス氏に絶賛され、日本フルート界の大御所吉田雅夫氏との共演に於て同氏をして「この子供達が成人したときが楽しみ」と言わしめ、あのベストセラーを続けているイ・ムジチ合奏団による「四季」の発売されるより前に、すでに全曲演奏を行うなど、各方面より注目を集めた。演奏曲目の点では、ヴィヴァルディ、バッハ、ヘンデル等の作品に関してはかなり高いレベルの演奏が可能になってきたが、バロック時代より後の作品、ロッシニやグリーグ等の作曲家のものについて今一步の成長が望まれ、そういった諸作品の征服が大きな課題となっていた。

その中で迎えた第十回演奏会。このすばらしい、感動的な一夜を忘れることはできない。当夜のプログラムは、コレルリのサラバンド・ジグとパディネリ、バッハのオーボエとヴァイオリンの為の協奏曲、ヴィヴァルディの2台のチェロの為の協奏曲、レスピーギの古代舞曲とアリアより第3組曲であった。NHK交響楽団の首席オーボエ奏者、丸山盛三氏を迎えてもたれたこの演奏会について同氏は絶賛し、一夜をその演奏会の興奮さめやらぬ団員達と語り明かしたほどだ。

その夜の演奏は、メンバーの年齢的成長と10年間培われてきた音楽的成長の融合であり、「子供の」オーケストラというイメージを脱し、「若者の」「青年達の」オーケストラとしての第一歩を踏み出す記念すべきものだったのであり、それ以降の飛躍的進歩を暗示させるものであった。11回目以降の主な活動は「四季」の再演にはじまり、ドヴォルザーク、チャイコフスキーの二大弦楽セレナードの演奏、フルートのルイ・モイーズ氏との共演等々である。この時期においては、曲目による出来不出来はほとんど見られず、いつも一定のレベルが保たれ、ルイ・モイーズ等の大ソリストとの共演ともなればそのソリストのインスピレーションをすばやくキャッチし、日頃以上の演奏を示しうる力をつけてきたのである。又、それまで一貫して指揮をとってきた井手氏にかわって一時、フルーティスト

の高橋利夫氏が独奏と指揮を行った時期があった。氏は巨匠マルセル・モイーズの愛弟子であり、その奏法、音楽性を学ぶことができたのは、コンチェルティーノにとってはたいへんラッキーであったことをつけ加えたい。しかし、コンチェルティーノは何と云っても、井手章夫氏のオーケストラであり、その音楽性は井手氏のセンスが浸透している。それ故もし指揮者なしで演奏したとしても、あるいは聴衆はそこに指揮者井手章夫氏の姿を見ることができるとは言えない。コンチェルティーノの20年間の成長は、井手氏の音楽に対する情熱と卓越した指導力によることは言うまでもない。それゆえに数多くのソリスト達との共演に於いて、又、指揮者としての高橋利夫氏の要求に的確に反応することができたのだらう。

20年目を迎え、コンチェルティーノは幸いにも若い二人の音楽家と共演する機会を得た。一人はチェロの林峰男氏であり、もう一人は指揮者堤俊作氏である。コンチェルティーノのメンバーはこの二人の演奏に深い共感を覚えずにはいられなかった。なぜなら、これまでの共演者は指揮者も含めてメンバーの一回り、いや二回りも三回りもうえの年齢層のいわば大先生であり巨匠ともいべき人々が多かったのである。それ故、メンバーはそのすばらしい音楽に何とかついていこうという姿勢で演奏にのぞんできたからだ。だが、彼ら二人の音楽は、いわばメンバーと同時代のフィーリングの音楽であり、メンバーの意図する音楽の代弁者のようにも思えた。そしてそういう音楽を具現する彼ら二人との出会いはメンバーの血をわかせる肉踊らせる結果を生んだのである。一方彼ら二人もコンチェルティーノを高く評価し、京都、松本、東京において共演がはたさされている。

（以上、20周年記念演奏会プログラム「20年の歩み」より補筆転載）

こうして20周年を迎えたコンチェルティーノ・ディ・キョウトは、23回演奏会において、特筆すべき経験をする事になる。それは、フェリックス・アーヨ氏との共演である。

弦楽合奏をするものにとって、フェリックス・アーヨの名は、イ・ムジチ合奏団との伝説的な「四季」のディスクと共に不滅の光を放っている。そのアーヨ氏と、その「四季」を共演することになったのである。

練習に於けるアーヨ氏の音楽に取り組む真摯な姿勢は、メンバーに多くの貴重なものを残してくれた。その素晴らしい音色は、アンサンブル全体に輝かしさを与えてくれた。

某音楽出版社の依頼で来ていた音楽評論家は、当初前半のプログラムだけ聴いて帰るつもりであったようだが、最後までコンサートを楽しんで帰られたほどである。

このような、いわば教育目的の合奏団として、メンバーの入れ替わりとそれに伴う技術的レヴェルの変動はやむを得ないことであるが、25回演奏会にひとつの転機を迎えることになる。それは、ヴァイオリンの総入れ替えにも近い交代である。しかし、2軍とも言うべきBクラスの、当時の充実度は、大幅な技術的変動無しに新メンバーへの移行を可能にしていた。

蛇足ではあるが、このBクラスは、最近ではAクラス（コンチェルティーノ・ディ・キョウト）に代わって、毎年のように松本の夏期学校に参加し、そのコンサートで好評を得ている。

そうして迎えた30周年は、フルートの金昌国氏やピアノの田中修二氏を招いてのモーツァルト・コンサートで、新メンバーによる新しい幕開けとも言うべきコンサートであった。

最近では（平成2年以来）、京都支部の研究科卒業生のために、卒業の機会に本格的なオーケストラとの共演を経験させてあげるべく、卒業演奏会でのコンサートに出演しモーツァルトを中心に演奏している。

1994年には、来日する予定のフェリックス・アーヨ氏より、「13年前に共演したコンチェルティーノ・ディ・キョウトと、是非一緒に演奏したい」との申し出を受け、再び共演する機会を得た。当時のメンバーはごく僅かしか残っていなかったが、多くのOBがこのコンサートに参加し、アーヨ氏の素晴らしい音楽を間近で経験することができた。

1996年の定期演奏会では、芸術祭賞大賞を受賞された小林武史先生をソリストに迎えてモーツァルトの3番の協奏曲を演奏した。

さて、今宵は、京都支部仲佐クラス出身の篠崎友美女史を迎えての40回である。この共演が50回60回へと続くステップとなる素晴らしいコンサートとなることを願ってやまない。

コンチェルティノー・ディ・キョウト演奏歴

- 1958年11月23日 京都支部秋季演奏会出演 指揮・井手章夫 (家政学園講堂)
- 1959年 8月 1日 土曜コンサート ジュニアオーケストラの夕出演 指揮・井手章夫 (円山音楽堂)
- 1959年11月20日 第1回演奏会 指揮・井手章夫 (祇園会館)
- 1960年 4月10日 才能教育関西地区合同演奏会出演 (相愛学園講堂)
- 1960年11月19日 第2回演奏会 指揮・井手章夫 (京都会館第2ホール)
- 1961年11月18日 第3回演奏会 指揮・井手章夫 (京都会館第2ホール)
- 1962年 6月10日 京都支部春期発表演奏会出演 指揮・井手章夫 (華頂会館)
- 1962年11月 7日 第4回演奏会 指揮・井手章夫 (京都会館第2ホール)
- 1963年 8月 3日 松本夏期学校コンサート出演 指揮・井手章夫 (松本・本郷体育館)
- 1963年11月23日 第5回演奏会 チェロ独奏・斉田 出/指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1965年 1月 7日 第6回演奏会 フルート独奏・吉田雅夫/指揮・井手章夫 (京都会館第2ホール)
- 1965年 5月13日 松本音楽院合奏団とのジョイントコンサート 指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1966年 1月 7日 第7回演奏会 指揮・井手章夫 (京都会館第2ホール)
- 1966年11月23日 第8回演奏会 オーボエ独奏・丸山盛三/指揮・井手章夫 (勤労会館)
- 1967年11月 8日 第9回演奏会 ヴィオラ独奏・河野昌彦/指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1968年 8月 5日 松本夏期学校コンサート出演 指揮・井手章夫 (松本市民会館)
- 1968年12月 1日 第10回演奏会 オーボエ独奏・丸山盛三/指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1969年 4月 6日 聖イエス会賛美大会出演 指揮・井手章夫 (聖イエス会嵯峨野教会)
- 1969年 8月 1日 松本夏期学校コンサート出演 指揮・井手章夫 (松本市民会館)
- 1969年12月24日 クリスマスコンサート 指揮・井手章夫 (ピートル教会)
- 1970年 1月11日 第11回演奏会 指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1970年 1月18日 特別演奏会 指揮・井手章夫 (松本・才能教育会館ホール)
- 1970年 8月 1日 松本夏期学校コンサート出演 指揮・井手章夫 (松本市民会館)
- 1970年12月29日 第12回演奏会 ピアノ独奏・辛島輝治/指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1971年 7月 3日 京都支部創立20周年記念 講演会と演奏会出演 (京都会館第1ホール)
- 1971年11月14日 第13回演奏会 指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1972年11月19日 第14回演奏会 フルート独奏・高橋利夫/指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1973年 5月24日 全国指導者研究大会コンサート出演 指揮・新井 寛 (シルクホール)
- 1973年11月18日 第15回演奏会 フルート独奏・ルイ・モイーズ/フルートと指揮・高橋利夫 (大谷ホール)
- 1975年 2月 2日 第16回演奏会 ピアノ独奏・辛島輝治/指揮・高橋利夫 (大谷ホール)
- 1975年11月 9日 第17回演奏会 フルートと指揮・高橋利夫 (大谷ホール)
- 1976年10月10日 特別演奏会 フルート独奏・高橋利夫/指揮・井手章夫 (松本・才能教育会館ホール)
- 1976年11月20日 第18回演奏会 フルート独奏・高橋利夫/指揮・井手章夫 (大谷ホール)
- 1977年11月27日 第19回演奏会 指揮・井手章夫 (シルクホール)
- 1978年 6月25日 特別演奏会 チェロ独奏・林 峰男/指揮・堤 俊作 (シルクホール)
- 1978年 7月30日 特別演奏会 チェロ独奏・林 峰男/指揮・堤 俊作 (松本市民会館)
- 1978年11月12日 第20回演奏会 指揮・堤 俊作 (大谷ホール)
- 1979年 5月20日 特別演奏会 チェロ独奏・林 峰男/指揮・堤 俊作 (東京・石橋メモリアルホール)
- 1979年12月22日 第21回演奏会 ファゴット独奏・中西祥之/指揮・堤 俊作 (大谷ホール)
- 1980年 5月26日 特別演奏会 チェロと指揮・モーリス・ジャンドロン (大谷ホール)
- 1980年 9月22日 第22回演奏会 フルート独奏・山田恵美子/指揮・堤 俊作 (西陣ホール)
- 1981年10月15日 第23回演奏会 ヴァイオリン独奏・フェリックス・アーヨ/チェロ独奏・林 峰男 指揮・古谷誠一 (大谷ホール)

- 1982年10月23日 第24回演奏会 フルート独奏・高橋利夫/チェンバロ独奏・古川五巳 /コントラバス独奏・今村れい子/指揮・堤 俊作 (京都こども文化会館)
- 1984年 2月 5日 第25回演奏会 ピアノ独奏・松山玲奈/指揮・古谷誠一 (京都こども文化会館)
- 1984年11月 3日 第26回演奏会 指揮・磯部省吾 (西陣ホール)
- 1985年11月16日 第27回演奏会 チェンバロ独奏・永山ゆり/指揮・新井 寛 (京都こども文化会館)
- 1986年11月15日 第28回演奏会 チェロ独奏・林 峰男/指揮・新井 寛 (茨木室内合奏団とのジョイントコンサート) (吹田メイシアター中ホール)
- 1986年11月22日 第28回演奏会 チェロ独奏・林 峰男/指揮・新井 寛 (茨木室内合奏団とのジョイントコンサート) (京都アバンティールホール)
- 1987年 3月26日 スズキメソードピアノ科卒業式出演 指揮・新井 寛 (大坂厚生年金会館大ホール)
- 1987年10月28日 第29回演奏会 コントラバス独奏・串田遼造 指揮・新井 寛 (シルクホール)
- 1988年11月19日 第30回演奏会 ピアノ独奏・田中修二/フルート独奏・金 昌国 /指揮・新井 寛、井手章夫 (京都アバンティールホール)
- 1989年10月10日 第31回演奏会 オーボエ独奏・見取香奈/指揮・新井 寛 (京都府立文化芸術会館)
- 1989年12月 3日 国際音楽短期大学設立協力コンサート オーボエ独奏・見取香奈/指揮・新井 寛 (松本・ハーモニーホール)
- 1990年 4月 2日 平成元年度京都支部卒業演奏会出演 指揮・井手章夫 (アバンティールホール)
- 1990年10月13日 第32回演奏会 指揮・新井 寛 (京都府立文化芸術会館)
- 1991年 4月29日 平成2年度京都支部卒業演奏会出演 指揮・江村孝哉、松村裕美子 (長岡京記念文化ホール)
- 1991年11月 4日 第33回演奏会 指揮・新井 寛 (京都府立文化芸術会館)
- 1991年11月14日 '91京都愛護 クラシックコンサートの集い 指揮・新井 寛 (京都市社会教育総合センター大ホール)
- 1992年 5月 5日 平成3年度京都支部卒業演奏会出演 指揮・新井 寛 (長岡京記念文化ホール)
- 1992年11月 7日 第34回演奏会 指揮・新井 寛 (東部文化会館)
- 1993年 4月11日 平成4年度京都支部卒業演奏会出演 指揮・新井 寛 (長岡京記念文化ホール)
- 1993年11月20日 第35回演奏会 指揮・新井 寛 (京都西文化会館ウェスティール)
- 1994年 4月10日 平成5年度京都支部卒業演奏会出演 指揮・江村孝哉 (長岡京記念文化ホール)
- 1994年 4月17日 特別演奏会 ヴァイオリン独奏・フェリックス・アーヨ/指揮・新井 寛 (京都会館第2ホール)
- 1994年10月23日 第36回演奏会 ピアノ独奏・田中修二/指揮・新井 寛 (京都こども文化会館)
- 1995年 4月 9日 平成6年度京都支部卒業演奏会出演 指揮・新井 寛、江村孝哉 (長岡京記念文化ホール)
- 1996年 1月13日 第37回演奏会 指揮・新井 寛 (京都コンサートホール小ホール)
- 1996年 4月28日 平成7年度京都支部卒業演奏会出演 指揮・新井 寛、江村孝哉 (京都こども文化会館)
- 1996年12月22日 第38回演奏会 ヴァイオリン独奏・小林武史/指揮・新井 寛 (京都府立文化芸術会館)
- 1997年 4月12日 平成9年度京都支部卒業演奏会出演 (京都府立文化芸術会館)
- 1997年11月23日 第39回演奏会 指揮・新井 寛 (東部文化会館)
- 1998年 5月16日 平成9年度京都支部卒業演奏会出演 指揮・江村孝哉 (京都こども文化会館)

Violin
Bow
Strings



マツヲ弦楽社
京都市上京区河原町通丸太町下ル東側
マツヲビル 4F ☎602 ☎075-251-1774



華麗なひびき……

世界の銘器を常時、
多数在庫いたしております。
お買い求めは、
ご来店のうえご相談下さい。

BUNKYO GAKKI



〒112 東京都文京区小石川2-1-11 電話03(3811)2084(代) FAX03(3818)5253

